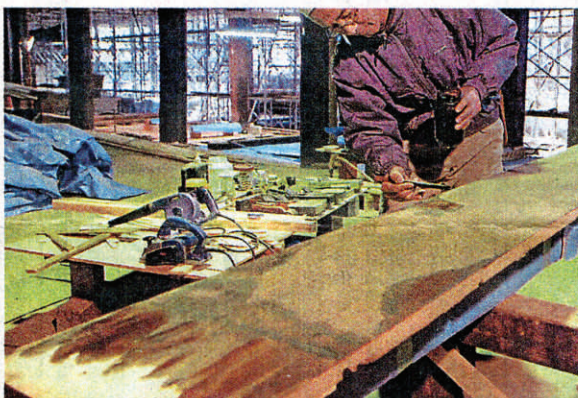


その19 知恩院・文化財に学ぶ

④文化財修復は「どこを直したかわからない」と言われるのがベストという。古材に合わせた微妙な古色塗りも重要な要素

⑤木の木質を計りながら、仕口をしっかりと組み込む棟梁の井尻正さん。100年、200年先を見通した文化財修復は、若手に技術を伝える大切な場でもある(京都市東山区・知恩院)



床の板材は、根太の幅に合わせて、微妙な凹凸が刻まれていた。「1枚の板も無駄にできない」という、文化財修復ならではの丁寧な仕事だ

集會堂は、寛永十(一六三三)年に火事に焼失、十二年に再建されました。仏間、上段の間と畳二百九十七畳一室を持つ。法要の際に準備し、集合する建物



文化財棟梁の井尻正さん(60)は、大工十八人を抱え、二二日一日、新しい棟梁を育てる使命感を背負っている。若い大工に百年先の建築のあり方を技術でつなげなければならぬ、文化財の場合、その百年、二百年先の建築維持への挑戦でもあります。



木林学

中川 典子

時の重みが語る寺院建築の美



京都には、数々の文化財があり、先ず修理に取り掛かった集會堂が、今、まさに平成の大修理とも呼べる文化財の修理、修復が行われています。それは、日本の寺院建築の平面積で五番目に大きい知恩院御影堂と十番目の集會堂。法上人八百

であり、小分けにもできる機能的なお堂です。現場を指揮される京都府教育委員文化財保護課の奥野裕樹技師(56)から、「集會堂を含む知恩院は非常にプロポーションの良い建物で美しく、実際より小さく見

え、見た目の約一・五倍が本当の大きさになる」と伺いました。徳川家光時代に再建され、本堂に上質の材料で丁寧に細かな仕事が行われています。徳川家の威信と名譽を広く伝えるためだったのでないでしょうか。

文化財の仕事は、一つ一つ補修が大切。古い部材を傷めず、埋め木をし、古色塗りをします。古色も色、調合、水加減は大工各々のレシジがあるそうです。また、間近で見ると、釘を柱と柱の間に打ち込む作業は、釘など金具は一切使用せず、木の木質を計りながら削り、仕口を作り組み込んでいく迫力に圧倒されました。海外にはない、檜の木質が大工の技術を上向きさせたのでしよう。



「おわり」

ベテランから若手へ、文化財の修復には多くの人がかわり、次の時代へ守り伝える。

未来へ伝統をつなぐ(釘一本、板一枚にも意味が)

また、府教委の奥野裕樹技師も、「この修理工事は、私の最後の仕事になるだろう。三百年に一度といわれる創建以来の歴史的な大修理、知恩院らしい質実で優美さのある建物を残していきたい」と、後輩の竹下弘展さん(32)に、古建築の立体的な線を大事にすることや実測の大切さを伝えていきます。知恩院でも、前田昌信局長(64)のもと文化財保存局に女性の担当者配属し、広く門徒の方々に説明できる修理事業へと配慮されています。文化財の修復は、たくさん資金、材料、技術、知恵などとともに、やはり人から人へ語り継ぐ、歴史を守るといふ心が形になっていると思います。釘一本、板一枚、すべてに意味があるのです。今回で、木林学も最終回。日本の素晴らしい木の文化を知っていただければ幸いです。ありがとうございました。